

先輩インタビュー

「自衛隊・防衛大学の始まり」

大東信祐 (S28)・福田 陽 (S28)

平成 30 年 7 月 19 日 パイラスクラブにて



◆大東信祐 略歴

昭和 28 年 (1953 年) 東京都立戸山高等学校卒業、同年保安大学校入学、保安大学校は防衛大学校に組織改編

昭和 32 年 (1957 年) 防衛大学校卒業、陸上自衛隊入隊

平成 2 年 (1990 年) 陸上自衛隊退官、防衛研究所戦史部長就任

平成 7 年 (1995 年) 靖国神社偕行文庫室長就任

◆福田 陽 略歴

昭和 28 年 (1953 年) 東京都立戸山高等学校卒業

昭和 29 年 (1954 年) 保安大学校入学、保安大学校は防衛大学校に組織改編 (昭和 29 年 7 月 1 日)

昭和 33 年 (1958 年) 防衛大学校卒業、陸上自衛隊入隊。入隊後、東北大学大学院にて「電気及通信工学」を研修。

昭和 50 年 (1975 年) 慶應義塾大学から工学博士の学位を授与される。

昭和 63 年 (1988 年) 自衛隊退職、民間企業に就職、同時に関東学院大学・青山学院大学で非常勤講師として平成 17 年 (2005 年) までシステム工学・電子計算機・オペレーションズリサーチ等を講義。

現在：一般社団法人電気学会終身員

先輩紹介者：尾崎英二 (S31)

【戸山高校入学の頃・米軍射撃場問題】

尾崎:ご紹介します。まず福田さんから。福田さんの中学校は千葉県内ですが、戸山に入学

されました。最初にお会いしたのは城北会の理事会で当時の理事会はほとんど四中卒業生ばかりで新制戸山卒業生理事の第一号が福田さん、第二号が私という状態でした。

福田：私たちの頃は丁度学校制度の変わり目でした。小学校は小学校制度がなくなって国民学校に第一期で入りまして、私たちが卒業後に国民学校から新しく新制中学・小学校になりました。戸山高校も昔は府立四中、それから四高、私が入るちょっと前に戸山高校。パイラスクラブの家主の石川さんは四中の最後の卒業生で6年間いらっしゃいました。その際新しく学区制というものが出来まして、新宿・渋谷・世田谷・目黒、これらが入る学区が戸山を受験できる、となりました。当時の試験はアチーブメントテストというもので、みなさんのときは英語があったと思いますが、私たちのときは国語・社会・数学・理科の4科目だけでした。同時に男女共学になりました。たしか2年先輩と1年先輩にそれぞれ2人ずつくらい、合計4~5名の女性が女子高から転入されました。

私の中学は先ほどご紹介いただきましたが船橋の海神中学です。そこから都立や教育大付属など東京の学校に行く人が多かったです。それについては片倉さんが文章を書いておられる千葉の会報に、私もご依頼がありまして書きました。その中でパイラスクラブのオーナーの石川正久さん(S27)は満州におられたときに私と同じ学校で私の1年先輩だったんです(満州國新京特別市西廣場在滿國民學校)。石川正久さんのお兄さんの忠久さん(S26)ともいっしょでした。しかし実のところ私は千葉支部の会合には1回しか出席していません。

さて私は昭和28年に戸山高校を卒業して、昭和29年に皆さんご関心の保安大学に第二回目の学生として入りました。それから定年にはならなかったんですが、53歳で退職して一般の会社に入って、同時に関東学院大学・青山学院大学で非常勤講師を70歳まで勤めました。その後は定まった職にはついていませんが、このパイラスクラブの階段をしっかり上がりきれぬ程度の健康は保っています。

さて、ここにおられる大東さんは戸山高校では同期で、防衛大学(当時は保安大学と言っていました)、そこに私より一年早く入学され、職場も同じ陸上自衛隊だったんですが、今こうしているような簡単に話ができるような関係ではなく、かなり差がありました。

大東：みなさんのお話をうかがっていて、私は昭和28年卒ですから、丁度制度の移り変わりの最たるものだったとつくづく思います。ここ5~6年の間でかなりマスコミの方、特にテレビ界の方から声がかかりまして「日本の一番長い日」だとか、TBSでやった先生の物語かなんかの、シナリオは別にあるわけですが、それと現実との噛みあわせ、つまり時代考証というようなところのお手伝いをしました。その中で戦後は遠くなりになり、というよりは戦後も含めて昭和全体が歴史に入ってしまったとの感を強くしました。そのテレビのディレクターはせいぜい30代半ばの人が撮影現場で働いているのですが、中学の話をしなすと、旧制中学を、「新制中学とおなじでしょ？」というような理解のレベルです。丁度教育制度の移り変わりのところのドラマだったんですが、戦争中はどうだったかについてNHKもハッキリ言ってウソをやってますね。いつか中野の小学校の先生の物語の朝ドラがあったことがあります、小学校の4~5年の女の子に竹槍持たせて仮標刺突(藁等を詰め込

んだ俵を地面に立てた 2 本の柱に固定し木銃で突く) というものをやらせている。しかも突進して仮標刺突ということをやらせているシーンがありましたが、あんなことは絶対になかった。丁度私どもの年代ですから。私は自衛隊でも銃剣術をやりましたので、突進仮標刺突というものはかなり訓練したものでなければやっても無駄ということをよくわかっています。そんなことが軍国主義教育だったとして、それを当時の軍国主義のシンボルであるとテレビで流して彼らはそれを全然疑問に思っていないということです。

先ほど福田君が言われましたように、私はよくそういう方々とお話するときには、「私は小学校を出ていませんので」とこう言うんですね。私どもは国民学校に入って国民学校を卒業した唯一の学年なんです。四中戸山の人たちから言えば、戸山高校になって初めて大量に入ってきた生徒です。昭和 28 年卒より前は四中で入った学年です。もっとも最後の昭和 20 年の春頃は試験はごく簡単なものになっていたようですけど。四中で試験をして採った学生と違って、我々のときは東京都のアチーブメントテストということで全部客観テスト。ただし、先ほど言った 4 科目で英語がないのです。

なぜ、英語がなかったかと言いますと、当時の制度上外国語が必須でしたが英語必須ではなかったのです。もっとも東京都の中でドイツ語やったのは独協、フランス語やったのは暁星しかありませんでしたが。したがって英語は選択なので試験を課せない、ということで 4 科目だったんですが、これが最後までたたりました。中学時代いかに英語を勉強しなかったかで後に苦労しました。こうして戸山に入りまして、入った 5 月に校舎が焼けました。

しかたなく新宿区内の小学校に我々は分散して入りました。確か 5 月の連休直後に火事があったので、分散した校舎に入って 1 ヶ月は無我夢中で動いて上級生にいじめられることはありませんでした。その後、四谷第四小、富久小に一年生だけで分散していましたが、上級生知らずで、二年生の 5 月位にその当時としては最もスピード早く校舎が建ち、戸山町に戻りました。上級生の昭和 27 年組は三年生なので受験勉強。二年生なんてかまってくれない。結局上級生なしという格好で高校生活は終わりました。

昭和 25 年 6 月 25 日のとき、我々一年生のとき朝鮮戦争が始まりました。今早稲田の理工学部のところ約 300m のコンクリートのドームが 5 つ位ありました。米軍の射撃場です。かれらの射撃の中で時間制限で撃つ射撃がありました。我々も自衛隊で後でやるんですが、一発弾を込めて八発の弾倉を持って構えると向こうでターゲットがバンと上がり一発撃つ、弾を込める、全部で 9 発撃って、これを 45~50 秒の中でやるわけです。これが朝礼の間で始まると高々 1 分位の間ですが、先生が何を仰っているのか全然わからなくなるんです。まだ米軍占領下ではありましたが、文教地区の真ん中に東洋一の射撃場があることがけしからんと、近所の海城、保善両中学、隣の中学等と一緒に緊急要請を出そうとそんな話があったり、そんな状態で学生時代を過ごしました。

【自衛隊になる前——警察予備隊から始まり保安隊に変わる、そして保安大高校】

大東：朝鮮戦争で昭和 25 年の 7 月には当時日本にいた米軍の殆んど主力が朝鮮に行ってい

まった。日本と言うのは朝鮮にとっては後方の兵站基地になったんです。それでマッカーサー元帥が吉田首相に通知を送り、警察予備隊 7 万 5 千を作ることを認める、というような内容です。作ることを許すという意味合いですが、これは実質的には命令なんです。国会等関係なしに当時占領軍の命令は政府の政令で処置をするという、これは米軍の指示による政令ということで、ホツダム政令と称したわけですが、法律体系と全然別に政令をポツと出して 7 万 5 千の警察予備隊を作るということです。で、本当は米軍は日本に居た米軍 4 個師団の跡を埋めるミリタリーパワーが欲しかったんですね。しかし彼らが作らせた憲法の中で戦力を持たない云々とあるものですから、警察の補助部隊を作れと言った。本音は 4 個師団分の戦闘部隊を作れと言いたかったと思います。

——アメリカからは補充は絶対来ないんですか？

大東：アメリカには当時そんなに兵力の余裕がなかったんです。それでナショナルポリスリザーブ (NPR) として警察予備隊を求めたわけです。

対米戦争が終わったときに日本内地には 100 万の陸軍がありました。海外には 300 万。トータル陸軍の動員兵力は 550 万位。その他海軍が 200 万位ってところですかね。で、終戦の時 100 万の陸軍が内地にいた。ただその中には装備も渡らない、ただ人だけ集めたというのもありました。それに対して米軍は軍事占領するつもりで来ていたので、最初は 15 個師団の約 50 万をデンと展開して、もし何かあったら武力で押さえつけるぞ、という体制を取ったんです。そこから逐次本国に帰還したりしました。占領軍の中にはニュージーランド・オーストラリア・イギリス本国といったところからも来ていました。中国も来る予定だったんです。四国は中国で占領する予定だった。ところが国内で内戦になりましたからもう来れないということになりまして、替わりに当初イギリスが治めて 1 年半位でさっさと帰って行きましたのでその後米軍単独の体制になったわけです。その 30 万～50 万 (戦後色々書かれています米軍がどのような体制で日本の占領をしたのか江藤淳も色々書いていますがどれも公開された明確な軍事資料はありません) が朝鮮戦争始まった時点では 4 個師団だけ残った形になりました。しかもその 4 個師団は平時編成でした。砲兵大隊は中隊数を 1 個欠落、歩兵連隊の中の部隊を欠にするといった具合ですね。若干欠編成になったから 4 個師団といっても 1 個師団の戦力は半分規模でしょうね。それだけ日本の治安がよかったですでしょう。しかし、その状態で朝鮮で戦争が始まってしまいました。真っ先に行ったのが米軍第 24 歩兵師団といって九州に展開していた部隊の熊本に駐屯していた一個大隊が当時の米軍の飛行機で釜山に運ばれてソウルに向けて上がっていったわけです。北朝鮮を阻止するんだと陣地をとった直後に向こうがやってきました。迎え撃ったのはアメリカ軍の上陸第一号部隊、このとき米軍は「アメリカ軍が乗り出してきた」というだけで朝鮮軍はしっぽを巻いて逃げるんじゃないかという高慢ちきな感覚でいました。しかし米軍の歩兵大隊の持っている火器では歯が立たずソ連製の T-34 戦車の一撃で吹っ飛んでしまった、という有様となりました。

——米軍は戦車を持っていかなかったんですか？

大東：ないんです。縮小編成だったんで。ソ連の T-34 というのは独ソ戦で勝利した主力戦車ですから半端じゃありません。当時米軍がもっていた 2.36 インチの対戦車砲、ロケットランチャー、通称バズーカ砲を撃っても T-34 は止まりませんでした。しかし、やっぱりアメリカは底力ありますよね。それは烏山というところの戦いで戦闘第一号でしたが、それから一週間後には 3.5 インチ (89mm) のロケット砲をアメリカから 10 丁程持ってきて大田の戦で敵の戦車をやっと阻止できました。米軍もそんな状態でした。

福田：昭和 25 年がいわば今の防衛省の母体のようなものが発足した年ですが、海上は、機雷の掃海作業がずっと続いていたんですよ。アメリカが撒いた機雷があつてですね、沿岸や港湾に機雷が残っていたんです。今の海上保安庁の中に掃海の部門が海軍からそっくり引き継いであつたんですね。それを海上警備隊と呼びました。それから陸上は警察予備隊。で今、米軍 4 個師団という話がありましたが、陸は 4 管区隊として東京・札幌・伊丹・福岡というところで 4 個師団を置き換えたんですね。給料は世間の労働事情から見てよかったです。応募者はものすごく多くてしかも 2 年で退職金はその当時 6 万円も出ました。その後昭和 27 年に陸・海それぞれ総理府の外局の保安庁傘下になって保安隊・警備隊と変わったのです。

大東：そういうことで内地にあつた米軍実力部隊は 1 個師団だけ残して全部朝鮮に出ていきました。北海道にいた 1 個師団を東京の押さえに持ってきて、さらにそれを仁川上陸にまわしました。

福田：当時、伊勢丹が宿舎になってたりしてました。確か 3 階から上位かな。米軍第 8 軍のね。昭和 25 年に校舎が全焼した際に、何処に再建するか議論がありまして、目黒区の旧海軍の研究施設、ここはニュージーランド軍が使用していましたが丁度空いていました (その後、現防衛省の諸施設となりました)。

大東：仁川を抜くためには日本側の警察力で国内を抑えられるという体制が必要でした。

——当時は日本で国内での争乱も恐れられる状態で治安は非常に不安定だったのでは？

大東：そこら辺については敢えて今の連中は勉強しないし、自衛隊も自然と出来たのでしょ、あるならそれでいいじゃないの、というようなことにしています。

この話をするにはもう一回国内治安の問題に帰らなければいけないのです。丁度我々が一年の時、あれは昭和 27 年でしたか、5 月 1 日に「血のメーデー」がありました。戸山の学生も少し参加して怪我した人もいるのだという話しですが、あまり表に出ませんね。あれは講和条約が発効した直後です。4 月 28 日に発効して 5 月 1 日のメーデーで皇居前の騒乱がありました。

福田：話がやや横道にそれるかもしれませんが、いや本当は話の中心かもしれませんが、その警察予備隊のトップになった人が四中大正 13 年卒の林 敬三 (はやし けいぞう) さん (後に、統合幕僚会議議長、日本住宅公団総裁) なのです。そのとき伊丹の親玉になった人が第三管区総監の大森 寛 (おおもり ひろし) さん (後に防衛大学校長) という四中ではその一年下の人。当時知らなくて、後でわかったのですが、錚々たる先輩がたくさんいた

んです。

大東：内務省警保局の系列の出身者たちです。林 敬三は鳥取県の官選知事でした。

福田：四中昭和6年卒の岡 新次（おか しんじ）という人は全然軍隊の関係でない人だったのですが、林さんに呼ばれて警察予備隊の本部に行ったら「お前は武器をやれ！」って言われたそうです。最後は武器学校の校長をやられ、防衛大学の教授も歴任されました。当時ともかく林さんにいきなり入隊させられ帰りには予備隊の制服を着て帰ったということで、本当かどうかわかりませんが、ある飲んだ席でそう仰っていました。そういう具合に色々城北会員の方は当初から自衛隊に多いのです。昭和10年の生島 元さん（陸）と昭和14年の井熊幹郎さん（海）に指示されて私が名簿を作っていたとき多い時は200人以上先輩がいらっしゃいました。

——偕行社・水交社の主要メンバーに多くの先輩がいらっしゃるとか？

福田：自衛隊の最初は旧軍が主要メンバーじゃなかったのです。城北会には警察・内務省の人も多く、林さんとか大森さん、後の航空幕僚長になった上村さん（四中大正14年卒、上村健太郎。初代の航空幕僚長、後に日本道路公団総裁）も内務省の人ですし、四中OBでも自衛隊では内務省の人が多かったのです。自衛隊で旧軍出身の方は松田さん（昭和1年卒、松田 武。後に航空幕僚長）という技術系の人で、やっぱり武器やられたのですが、そういう人ぐらいですかね（当時旧正規将校は公職追放の時代でした）。

大東：ところで日本にいたアメリカ軍が全部朝鮮に行ってしまった後をどう補充したのですかということですが、これはアメリカの特色でしてね。第一次大戦のときアメリカは100万の兵力をヨーロッパに送ったのです。しかし、戦争が終わったら平和が来たということで、もとの12万の連邦軍に戻ってしまったのです。ということで同じように第二次世界大戦後もヨーロッパ・アジアに出していた兵力を逐次戻して国内は最小限の兵力にしようとした。これはアメリカ合衆国の元々の考えなのです。合衆国政府を決して強くしてはいけない、連邦軍ではなく地域の治安は州兵でもてばいいじゃないか、連邦政府の力を強くすることはない、海軍は国家で統一しなければならないが、特に陸軍は州兵があればいいじゃないか、こういうような思想がありますのでそれで逐次解散していったわけです。そしてそれをもう一回呼び集めて部隊に編成して装備して弾薬等まで持たせて派遣するにはやっぱり少なくとも3ヶ月位かかります。昭和26年中には米軍、合衆国陸軍というものはごく小さいものですから、そこで緊急に動員した州兵の2個師団を日本に送り込んで来る、ということになります。その前後では、当初できた警察予備隊を米軍の跡にあちこちに配備していたものを、新たに米軍2個師団が来るということになって、さらにあちこちに追い立てて、それは大変な騒ぎになりました。この状態の背景として国内治安体制、その当時の警察の体制がどんなものかをよく知っておく必要があります。

戦前は国家の統制で内務省警保局というのが全部の警察をコントロールしていたのですが、内務省は軍の力が大きくなってから、権限をどんどん削られました。その前は大蔵省より内務省のほうが強かったようです。内務省は地方の知事の任免権などまで持っていました。

たから。戦前軍が勢力をはってきていたのを戦後は軍をあまり大きくさせないようにしようとなり、そこにさらに渡りに船でマッカーサー書簡で「警察の補助勢力としての」という表現がありましたので、警察予備隊を「これは内務省の下におかなければいけない」ということで内務省警保局関連の者を警察予備隊の頭に持ってきて、その下に部隊を作りました。警察自体はその当時は国家地方警察と自治体警察と二つに分かれていました。国家地方警察と言うのは各県を担当しているのではなしに、アメリカのシェリフ（保安官）って昔いますね、あのシェリフと同じに地域の選挙で地域ごとに警察署を作って自分で運営しなさいと言って、その警察を独自にもてないようなところには国家公務員としての警察官を配置しますと、そういうのが国家地方警察です。

これを束ねるのが国家警察本部というのが一応内務省にあります。それと自治体警察は公安委員会の指揮下で統制がとれたような、とれないような格好であります。その国家地方警察に命じてとりあえずの隊員募集採用、取り敢えずの編成ということをやらせました。ただし、段々それでは警察業務自体がうまくいかないというので県警にまとめていくということになりました。県警にまとまってきたのは昭和 30 年代に入ってきてからだと思います。それまでは国家地方警察と自治体警察の間がしっくりいかない、というような状態でした。福田：今でも各県の警察官と言うものは、警視以下の方は地方公務員、警視正以上は国家公務員、新宿署なんかは署長が警視正、小さい警察署は警視が署長、そういうのが残っているのですかね。

大東：残っています。警官の肩書で言えば、警視庁巡査、神奈川県警察巡査は地方公務員。ところが大きな署の署長以上、県警本部の課長以上は全部国家公務員になるわけです。ということは、人件費の予算から人事権まで全部警察庁がにぎるわけです。私が幹部学校の学生のときに警察から警察行政ということで講義に来たとき、「そういう組織、公安委員会というものが各所にありますね、よく東京の警察庁がそういう組織全部をコントロールできますね」と聞くと、「それは官僚のやり方ですから、『予算と人事』これを握っていればちょっと時間の早い遅いはありますがコントロールできます」という回答でした。まさに今の国家体制でもそういう直轄で人事庁を作って上級幹部の人事はおれがやるんだという強い政治ですから、官邸の意向が強く、みんな官邸の方を向くんですね。

そういうことで昭和 26 年に講和条約ができて、翌 27 年 4 月 28 日に発効、5 月 1 日に「血のメーデー」と言う状況の中で、昭和 25 年にできた警察予備隊はポツダム政令で出来たのもので、マッカーサーの指示に基づく命令ですから日本の根拠法規がないわけです。独立政令になるわけですね。それを法治国家の中で、独立後もそのままにしておくことはできないということで保安庁設置法という法律を作って警察予備隊から保安隊という名に変えました。名前を変えて法律の基礎は与えましたが、任務は国内治安の維持に当たるということで変わりません。

ということで、まず保安隊の時代がありました。その法律の体制で保安庁の制服部隊の職員を養成するための養成機関を作りますというので保安大学校というのを設ける、ここでや

つと本題の「自衛隊・防衛大学の始まり」になりました。

【保安大学校から防衛大学ができるまで】

大東:それで、その当時法律は昭和28年の4月には作りますという条文が出来たのですが、条文が出来たからと言って学校が建ち上がるわけではないのです。校長が決まったのが昭和27年の8月の末だと思います(創設初代学校長は、慶應義塾大学名誉教授の榎智雄氏です)。それから制服の人員を集めて組織を作りました。ところが兵隊さんの階級章はあっても、そんなのを集めたって教室ができるわけではないですよ。各教室をやらなければならないということでしたが、私どもの入学直前の頃、保安大学校は紙の上ではできたけども、実質は準備室があっただけで、教室はまだ開いていない状態でした。第一、試験問題が作れないということで、一期生の試験問題は代わりに人事院が作成しました。従いましてその当時の国家公務員の試験もそうでしたが全部五肢択一の客観テストで回答は全部〇×で、それ以外何も書いたことはありません。昭和27年の8月に入学条件が決まって募集要項が出たのは9月ぐらいでしたかね。それを見て私が一番個人的に困ったのは社会科が「一般社会」必須ということでした。だいたい我々の社会科というのは一般に日本史・世界史が常識的。「一般社会」は何が出るか範囲が広い。どうしようかと思っていたところ、当時の社会科の先生で佐々木勘次郎さん、あの先生が我々のよく面倒を見てくれたので、「募集要項で一般社会こういうふうになっているんですが、どんな勉強をしたらいいんですか?」と聞いたら「参考書をあれこれ言わないで教科書をとにかく何回でも読め」、と言ってくれて、そう言われても時間がないので、通学の電車の中で教科書をカバンに入れて一生懸命教科書を読んでその知識で試験を受けました。

話は変わりますが戸山高校というものは私の時代にはまだ非常にハードなコアを持ってまして、一年の時は数学は解析Ⅰ、これはきわめて常識的ですね。二年生になった時は数学は幾何必須。解析Ⅱはやらせない。幾何的な理論の組み立てと考え方がわからずして数学をやったとは言わせないというのです。解析はゲームですからなんとかできます。しかし、幾何はポジションなんかの問題でひらめけばパツと解けるけど、ひらめかなかつたら一応バツですからね。非常にリスクیだったのであまり人気がなかった。でも二年では幾何必須だと。こんな風潮がまだ残っていました。柴田先生(あだ名はガンマー)とか有名でしたね。

そういうことで警察予備隊は国家地方警察本部が軸になって組織編成し、その主要メンバーを引き抜いて予備隊本部となり、そして部隊を編成していきました。米軍の方は旧軍陸軍は動員で最高5百50万いたんだから7万5千の将校・下士官位すぐ集まるだろうと思っていたようですが、でも集めてみれば烏合の衆が集まっただけ。主要国並みの軍を作るとすれば、まず基幹要員の幹部と下士官を養成し、その幹部・下士官の指導の下に兵隊を訓練することが必要です。それをただ兵隊の駒だけを7万5千集めて誰がリードするのでしょうか。そのキャンプにいた米軍の士官がリードすると外務省が言ってデカイ面している。それではものになる部隊はできないわけですね。ところが旧軍の士官学校・兵学校

を出た人たちは軍国主義者であるということで公職追放になっているからそれを任官させるわけにはいかないとなくなっていました。仕方ないので官庁等の中堅職の人を公募する、さらに最初に入った人の中で高学歴の人を抽出して教育するとしました。そういっても、軍隊教育の方法論なんて何も持っていない人たちにただ階級章を与えておまえ連隊長やれ、といわれたところで出来る訳がありません。ということでなかなか戦力化されなかったのです。米軍の方は、担当のGHQ民生局自体は「かなりまとまっていい成果が出ています」、と自画自賛して言っていたそうですが、GHQ情報部門の評価は「あれは役に立たねえ」、といったもんだったようです。そういうことで講和条約が発効したのが昭和27年4月28日、サンフランシスコで調印して半年後です。そのときには国家行政組織法にもとづき保安庁設置法及び保安隊法を定め保安庁として海上の警備隊と一緒に陸上を第一幕僚監部、警備を第二幕僚監部としたのですが、名称としては、陸軍の人選に関しては基本的に服部卓四郎という昔の参謀、および参謀本部の系列の人たちが、再軍備するならこういうメンバーを集めたらいいだろうというところまで詰めたものを持っていたのですが、服部の言うことは聞きたくない、ということで採用されませんでした。あまり上級者にそういう経歴の人がくると警察がコントロールしにくくなる、といったことがあったんだろうと思います。旧軍解散になってまもなくより古い者は自衛隊にも入れないということで、陸士35期位以降の人をごくわずか入れ、後は中佐以下の方を入れて、逐次部隊に配置し、部隊編成をして、初めて第一号の野外演習が出来たのは昭和28年の秋。富士の演習場に移動して展開して演習をやったのが、部隊らしい行動がやっととれた初めです。ですから昭和25年に予備隊を作ってそれだけの本格的な演習が出来るようになるのに3年かかったわけです。その間に幹部を養成して、最初は武器もカービン銃だけ。しかもこれは米軍管理で、訓練終わったら米軍の武器庫に納める、というシステムでしたが、それをだんだん部隊に管理をさせて、一応昭和28年の時代には大砲から戦車まで装備されるようになりました。戦車は米軍が極東に持っていたのはM24という戦車でした。20t足らずの戦車ですが75mmの高射砲の砲身を積載し、キャデラックのガソリンエンジンを二つ積んで走るのですが、昭和20年に日本の道路が悪い、橋等が弱い、ということで小型戦車が必要だと、それで作った戦車ですが、いわゆる板バネのスプリングで、ヘリカルコイル（渦巻き）スプリングをほとんど使っていません。ほとんどのサスペンションはトーションバーを使っています。ヒールのねじれでスプリングをとっています。それでチェンジレバーがありません。その当時昭和20年でトルコンを使って自動変速でやってます。考えてみたら日本のトヨタ・日産のトルコンの乗用車が街に出して使えると言われたのはいつ頃ですか？昭和50年前後でしょ？ですから軍事技術にどれだけ差があったか、という問題です。とにかく日本には軽戦車ですがM24が与えられました。

そういう段階で米軍が朝鮮に行って在日基地での数を減らしていくということになって、保安隊・自衛隊も7万5千から11万5千に逐次増強して法律上のピーク18万というところまでいきました。ところが今度はポスト冷戦という時代に突入するわけです。ソ連に対抗

する必要はなくなり自衛隊は何に対抗するのかとなります。それで方向を変えて、日本の資源はそもそもほとんど外国からくるので、シーレーンがやられて資源が枯渇すればいくら自衛隊がいても駄目じゃないかとなりました。だからシーレーンを強化すべきだということになりました。また防衛業界としてもその方がもうかります。またいくらゼロ戦持ってきたところでジェット戦闘機と戦闘する訳がない、最新の戦闘機が必要、となってどんどん装備にカネがかかってきました。一方、陸上自衛隊は18万置いてどんな戦があるのだろうかという疑問も出されます。中国の軍隊は強いといっても日本に上陸して日本国土占領に来る意図はないだろう、また輸送能力もないだろう、というような話の流れが現在になっています。陸上自衛隊の兵員数は（丁度私が現役最後のときには定員18万弱いたときがあるのですが、沖縄が返還になったときに沖縄に陸上部隊を配置して18万になったのですが）、今は16万位です。実はその中に即応用意と称して有事の際に召集する部隊つまり24時間以内に来いといったことを承知の即応部隊、その他に予備で呼び寄せられる志願をした者これらを含めて18万ありますというように帳面をごまかされていました。陸はまさに軍縮です。なお、戦車だとか大砲はいらない、本土で本格的な地上戦やることないとなりました。戦車はピークのときは1300両ありましたが、今は400両。大砲は1200門位あったのがいまは半分以下の500門。定数自体を削られました。定数を削られるとこんどはその生産基盤もなくなるわけですね。果たして日本の有事というものをどう考え軍備を持つのでしょうか。ある人は言ひまして、「自衛隊は非実戦的である、実戦にそぐわない形態を持っている」。何だと言うと、「あんなちっぽけな衛生隊で戦時の師団の9千名の師団で出る負傷者を処理できないじゃないか」。そりゃそうです。弾薬の補給のことでも、「今持っている車で運べるのは何トン位か、それで足りるのか」。ところで、戦時に必要な衛生も補充もそのままのものを平時から持つておくことは正しいのでしょうか？衛生というものは少し外科的な面が必要ですね。その外科の医師と看護師を戦時の負傷者がばんばん出るときに必要な数を平時から維持しておくのが必要なのでしょうか？というようなことでだいたい補給関係・衛生関係は平素は小さくして戦時に増強して大きくしていくのが主流です。憲兵・情報要員等を置いて一人一人情報を聞き出すための調査をする、その人員を平素から置いて対処することは本当に必要なのですかね？実戦的な部隊と言うものはたしてどんなものであるべきなのかということに対しても誰も政治家も官僚もはっきりした見解を持っていないのが現状です。

【自衛隊の人脈・人間関係、官僚組織としての自衛隊】

福田：林 敬三（はやし けいぞう）さんは鳥取県の知事、宮内庁次長をやった人でその後警察予備隊のトップになった四中OBです。その林さんが人集めして第三管区総監の大森さんや幹部候補生学校長の平井重文さんなどはそういった人脈で集められたみたいですよ。初めはとにかく公職追放で陸軍・海軍の将校の人は入れないのだから。だんだん下から解除していったわけです。林 敬三さんが選ばれたもう一つの背景は林 敬三さんのおやじさ

んが林 弥三吉（はやし やさきち）という陸軍中将だったからですね。

大東：今年の春まで城北偕行会というのがありましてね、偕行会の四中・戸山出身の旧陸軍将校・防衛大にいた連中で会を続けていたのですよ。最後の幹事をこの二人でやりまして、ピークの頃にご案内を出すのは 150 名位で出席は 25 名位で毎年一回位集まって懇親会やっていたのですが、だんだん先細りになって、（私も制服を脱いで東京に帰ってから参加しましたが）最後の頃は防大で言えば 20 期以降となりますが卒業生で自衛隊に入った人の消息がつかめなくなってやむなく今年春の会合を最後に閉めました。

——保安大学 1 期生は何人でしたか？

大東：定員は 400 人でした。現在は定員は 530 名。というのは航空自衛隊ができたから。当初 300 名の予定でいたんですが、体を壊したりして落ちていく人がいますけど、1 期は上から落ちて来る人がいないわけで、それと航空自衛隊ができたときに航空自衛隊予備として約 60 名近くの者が抜けたものですから、陸に結局落ち着いたのは 210 名位ですかね。現在生存者は 60% 位です。航空は防大 130 名が航空要員です。パイロットは全部幹部ですからね。

福田：最終的にアメリカが言って来たのは 30 万人にしろという要望。それは断ってるらしいですよ。私共が三等陸尉に任官した大学同年次の同期生は約 750 名でしたが、多分増強途上にあったのだと思います。

大東：結局米軍は昭和 29 年前後に 15 個師団 30 万人にせよと言っているのですよ。10 個師団でかつ師団の定員をそれも値切って値切って縮小して、大蔵省のやりそうなことですよ、さらにそれを支援する各部隊を減らして 18 万人という数を日本側ではじき出して、うちは経済上これくらいしか出せません、と言ったのが 18 万人です。今は 15 万人。私たちが現役最後の頃は 18 万人でした。その後大きな装備がどんどん入ってくるたびに陸の人員を減らせ減らせということで削減されました。特に財務相の麻生さんが厳しいらしいですね。

——米軍のマリン（海兵隊）というのは組織としてはどうなっているのでしょうか？

大東：あれは軍として正規には海軍の一部です。しかしマリンというだけで全米で 19 万人位いますから陸上自衛隊より多くいます。陸上・海上・航空と自衛隊はバリエー立てるのが好きですから、対空ミサイルを陸が持つのか空が持つのかも問題になります。対爆撃機用は航空が迎撃戦闘機と連携して、それ以下の細かいのでやってくるのに対しては野戦防空、要するに展開した部隊を防空するものを流用するので陸が持つと、いうのでおっつけていますけどね。海兵隊と言った場合、上陸する兵員は訓練から言っても陸ということになっています。じゃ、船まで全部陸にしてくれるのか、といったときには、なかなかそうはいかないみたいです。現代は上陸用舟艇に乗って海岸で波けたてて駆け上がってくるなんていうのは時代遅れですから。船からヘリコプターでボンと降りて、海岸の所へ行って、後、物資はしょうがない全部陸に上げて、そのとき確保するのはヘリでいくとして、もしくは船からでなく陸からオスプレイでどんどんつぎ込んでくるといったり…。こういう時代になっているの

ですが、オスプレイをどこで持つか、兵員を運ぶための船はどこが持つことになっているのか、人員運ぶのは簡単ですが戦車からトラックから弾薬・糧食まで全部積み込んでとなるとなかなかそうはいかないものですね。現在の平常法規でいったら火薬類を船に積むことはできないとなっています。弾薬類のない補給品って自衛隊にとっていったいなんなのでしょう。また弾薬を積みこんだら人を乗せてはいけない、となっています。しかも火薬類を扱うのはお日様の出ている時間で、夜間にそういったものを扱ってはいけないということにもなっています。経産省の規程に例外がないものですから、自衛隊が弾薬庫から車に弾薬を積もうとしても、「夜間はダメ!」、となります。つまり見えないから誰も危険を監督できないというわけです。平時の法規はそれで済んでいます。その平時法規を自衛隊と言うものは守らなければならないというのはおかしいのではないですか。そもそも例外規程が書いてないから変なことになるのです。一番の笑い話は自衛隊の施設機材です。渡河、川を渡るためのものとして、自走浮橋があります。自動車のところにフロートがついていて水のところへ行ったらフロートの両方を開いて固定して、それでエンジンで推進機を回して船になって川を渡れるものです。国交省は、これは船舶構造令に違反している。前に白灯を、マストを立てて旗立てて、右側に赤灯、左側に緑灯を点けなければ運航できないと言います。そんなの点けて敵の前に行けますか!

日本は平時しかないのです。戦争にならないことになっていますから。ただし、不幸にして戦闘になったときの作戦の検討はしています。ただし制服組がどこまでものを言えるのかは別問題です。というのは、現在の自衛隊と言うのはどういう法律の根拠によって設けられているのかと言いますと、国家行政組織法の下で防衛省設置法を根拠として行政官庁の一つとして設けられています。防衛省設置法の防衛省の下組織として自衛隊があるわけです。戦闘に対するものが行政組織とされているためにそこから色々な摩擦が出てくるわけです。

福田：国勢調査のとき指図が来るのは、国の行政組織に従事しているというふうに書いてくれときます。それしか書くところがないのです。そう指図されないとわからないのです。

大東：国家行政事務というのがそのように書く欄になっていますよ。国勢調査の時は、——災害の時は自己完結型の部隊なので、国からかなり頼られていますね。

大東：自衛隊の性格からいって当然そうなります。私も災害派遣に関係しましたが、警察に来てもらっても困るのです。東京の警視庁から100人の部隊が来ても「俺たちどこ泊るの?」「飯どうしてくれるの?」となります。警察を受け入れたところだってその人たちの寝るところや現地の輸送やら寝具の管理や飯の用意まで、警察は自分でやろうとしませんから（能力を持っていません）。自衛隊は自分で煮炊きもするし、泊るところは天幕張ってでも自分でやるし。

——それは自衛隊の組織に特色があるからですね。日本は災害も多いし。であれば、ちょっと奇想天外ですが、もしゴジラが出たらそれに対抗するのは自衛隊しかありませんし、法律上これはたぶん災害派遣になるでしょう。そう考えると災害派遣ですべて成り立つのでは

ないですか。

大東：自衛隊の行動には、国内治安に対する治安行動と対外的な直接侵略に対する対抗措置つまり国防とに、大きく二つに分かれるわけですが、その国防という問題に対して「警察比例の原則」を適用しているのが問題なわけです。この「警察比例の原則」とは、たとえば警察は相手が短刀しか持っていないところに機関銃を持って行ってぶっぱなしたら権力の過剰行使だ、相手よりちょっと上くらいのレベルのものを持っていけというようなものです。だから警察は相手の状態に応じて攻撃内容をコントロールして「警察比例の原則」の範囲でおさめるのを趣旨としています。それをそのまま自衛隊の国防にあてはめているから敵と戦闘する場合においても必要に応じた最小限の力でこれを押さえなければならない、となってしまいます。このことはちゃんと法律に書いてあります。

戦争と言うものは勝つか負けるか、生きるか死ぬか、であり、勝つためにはすべてのことをやらざるを得ません。極端なことを言えば毒ガスでも原爆でも使うというところまでエスカレートします。これをいいとは言いませんが、敵に勝つための必要最小限の力でそれをやるということは、こちらの損害がそれだけ大きくなるということです。負けるかもしれません。治安行動のときも武器等防護・重要警護対象防護のために武器使用が認められていますが、その場合においては相手に危害を与えてはならないだとか、威嚇ですませなさいとかとなっています。国内治安に関しては警察が全権を握り自衛隊をその下で使おうという魂胆が見え隠れしているわけです。そもそも国家としての最終の力は軍隊で、軍隊が国家の存立にかかっているとなったら人道もなにもない、現政権を守るとというのが軍隊の本質です。それを警察の指示にしたがってやりなさいなんて言われては軍隊の資格がないのです。——五百旗頭（いおきべ）元防衛大校長は大変リベラルな方ですが、あの方は防衛大学でも異色の人ですか？

大東：異色ですね。あの方にあつたら防衛大学はいらないですね。「人材を広く求めるためには防衛大学三年生に高等専門学校卒業生から転入させたらいいじゃないか」、と言われたことなんか、防衛大学で何の先生をやってらっしゃったかってことになりますよ。防衛大学では同期生が集団生活をしてお互いの親和団結を図り、任務意識・責任感を生活から訓練から学科からすべてを通して涵養していくというのが特色なのです。高専二年生位から来て高専の学科の上澄みで防大三年生に転入したらどうだと言う人を私は信用しません。論理的にはそうかも知れませんがね。それではとてもじゃない、国防はできません。

【戦史資料——靖国神社】

——靖国神社は、マッカーサー最高司令官にカトリック神父が兵士の慰霊場所をなくしてはダメだと直言して残ったとか言われていますが、非常に微妙な環境の中で実に上手にやってこられたそのあたりのことをお聞かせいただけないでしょうか？

大東：私は自衛隊を退官後防衛研究所の戦史部長として勤務しその後靖国神社に約10年間ご奉仕したのですが、靖国神社が祀っている英霊については、やはり国家のために一命を

捧げた人に対してはそれなりに遇さねばならないという考えです。当時、極端な話し、「特攻隊は軍国主義の走狗だったんだからそういうものは即刻排除せねばならん」という議論すらあったのですが、これは遺族を初め国民感情からも受け入れられなかったようです。マッカーサーの基本的な間違いはキリスト教的な一神教というものが唯一の正しい論理であって、日本のようにアニミズムとまでは言いませんが、祖先崇拜・万物に霊有り、という多神教の世界というのは一神教の世界に比べると遅れている、原始宗教に過ぎないというところですよ。その日本の原始宗教を利用して天皇を世界の中心に祭り上げようとして画策したのが大東亜戦争であるという史観で、しかも白色人種以外は蔑視しているわけです。日本人というのは本来残酷な、慈悲心なんか関係のない思想を持っている人種である、という人種的偏見、戦時のプロパガンタのもとに、アメリカの主義・思想というのは文明国の中で一番新しい思想で、これが世界をリードすべきであるというのが根本にあります。つまり彼らのピューリタンの宗教心ですよ。キリスト教を信じている者以外は人間ではないというのが当時のイスパニア時代から、それからアメリカにピューリタンが行ったときからの考えです。だからインディアンなんか人間じゃないというわけですし、オーストラリアのアボリジニーに対してもそういう考えでした。

そういった白人至上主義的な考え（風潮の範囲で「論理」とまでは思いません）に凝り固まって、日本人は黄色人種であり、劣等人種であり、本来能力のないもんだと決めつけたわけです。つまり、日本は昔の観念に凝り固まって、それに凝り固まった挙句に世界に反乱を起こしてろくなことしなかったというわけです。こういうようないわゆる白人至上主義的な感覚というのが背景にあったことは間違いのないと思います。マッカーサーが日本占領の終わった後で、日本人は12歳の精神年齢であると称したのはその感覚の現われです。私は非常に皮肉屋ですからね。私が沖縄におりましたときにアメリカ建国200年祭典と称して各県に米軍がお祝いのキャラバンなんかやりました。それが沖縄に来るといっているので、自衛隊さんも交通整理に協力してくれと言われて、「結構ですよ。お国の200年おめでとうございます。米軍のみなさんも一回奈良と京都に行ってみてください。1300年前の寺社を大事にして皆が手を合わせて拝んでいるのをご覧になられるでしょう。お国の200年というのは偉大ですね。」と言ってやったんです。要するに彼らは日本に来るのが遅かっただけです。

——この高度に文明の発達した国を占領するという事は一体どういうことでしょうか？

大東：ここで私の持論を述べさせていただきますと、軍隊というのは何かと言うとこれは国家権力なのです。国家権力を外国に出したらほかの国の指揮下に入れることは基本的にないのです。ところが国家行政組織法の行政組織の一環としての自衛隊はあくまでも国内的な地位しかない。これを外国に行かせて紛争に巻き込まれ現地の人をケガさせたり死亡させたりした事件が起こったときにどういう結果になりますか？日本の経産省などの人が外国に駐在していて事件に巻き込まれて現地の人をケガさせたりしたら現地の刑法で裁かれるのです。自衛官が外国に行ったときに現地の法ではなくて日本の判断が出るのでしょ

うか？それをそのままにして「身の危険を顧みず職務遂行」って言われても何言ってるんだ、となりませんか。東郷平八郎が軍艦「浪速」の艦長でハワイに寄港したときに、ハワイの在留邦人が強盗か何かの犯人と間違われて追っかけられてきたのが「浪速」に逃げ込んできました。アメリカの官憲が「即引き渡しを要求する」と言ったときに「この艦の中に入った以上これは日本の法律によって処断するので、アメリカの警察が口出すことはまかりならん」と東郷平八郎は言ったそうです。東郷平八郎の時代はこう言えたのです。しかし、もし自衛官を外国に出してこのような事案が発生したとき外国が裁判権を主張したら日本はどう答えるつもりなのでしょう？そういった中途半端な立場に自衛隊を置いておくのが間違いなのであって、自衛隊を軍隊であると言えれば、即座に国家主権の行使の範囲で「日本の軍法」に従って裁くことができます。

【レーダーから情報兵器まで】

——福田先生にお聞きしたいのですが、防衛大学を出られて自衛隊に入られた後、民間の会社に就職されたのですが、環境の違いはどうでしたか？

福田：会社に入ったら、軍関係・国の行政機関と違ってこちらの供給する業務内容より、業務を受ける相手の方がそれをどう受けとめるかに注意を払わなければならないところが大きく違いますね。いわゆるサービス精神です。それで代価をいただくわけですから確かに全然違います。その点はよく切り替えなければならないですね。

私の場合は自衛隊でも研究開発部門に入ったので、それほどよその方に気を使うこともありませんでした。一方、企業全体としてはお客様へのサービスに徹していました。丁度週休五日制が始まったときでしたが、採算が合わなくても週休二日制で従業員のいない土曜日には部長級以上の者が誰か出勤するとか、よそとの連絡に支障がないようにしなくては行けない。対外的には今日は休みですとはいかない。そういうところまで、よく切り替えないと務まりませんね。

——民間のお勤めは何年位だったのですか？

福田：丁度10年位でしたね。

——そのあいだに大学で講師もされていたとか。

福田：ええ。土曜日にね。

——そのときの学生さんの雰囲気と、ご自身の培われた教養とのギャップは？

福田：学生は、多いところは100人、少ないところでも60人でした。それだけの学生さんが登録して出席するわけですから大変です。個別指導なんてできません。全体のカリキュラムを見て、学問的に深遠なものより社会に出て取り敢えず役にたつ様なもの、たとえば通商産業省所管の「情報処理技術者試験」の出題範囲を参考にするなど工夫して、講義するように考えました。10年やってましたが、なにしろ情報処理とか、いわゆるコンピューター利用の実務なので、こまごまとしたことを話してもきりないので、全体の講義状況をよく考えて、知っていればどこかで聞いた話だな、って思ってくれるような話にしました。たとえ

ばゲームの理論ですが、最初学生から「先生、これ勉強するとゲームに強くなりますか？」と聞かれたのですが、「それは関係ないんだ。これは、上は国家と国家、下は人と人とのやり取りをどううまくやるかという理論なんだ」と言いました。たとえば「囚人のジレンマ」というのを例に話したりしました。ゲームの理論というのは日常では滅多に聞きませんが、新聞にときどき出たりすると、あの先生に聞いたな、つてくらいには残ってもらわないと困ると思いました。またシステム工学という分野の話をしたり、コンピューターの歴史なんてものも含めました。今の人はコンピューター使うのは日常ですが、それをまあまがりなりにも大学出たんだといえるように、一番初めに遡って、チューリングという人の話から始めるのです。あの人が考えた、紙テープを動かして数字を処理するというのがコンピューターの始まりですから。そういうふうにコンピューターの昔の人なんて誰も知らないくらいに理論の変化も早いのですが、実はものの変化もすごいのです。記憶素子とかも、それも基礎からお話ししなけりゃいけない（電子回路のフリップフロップ回路〈DRAMの基本回路〉）。短い期間に急速に記憶容量が増加するムーアの法則とか。コンピューターがらみのものの進化には本当に驚いてしまいますが、私が持っているこの携帯電話でも400とか送った電文がそのまま残っています。記憶媒体は私が教えた頃はマッチ箱位でやっと4メガビットというのが出たものです。ただしこれでも帳簿にすれば相当な量（日本語1文字は16ビット）にはなりますけどね。その記憶素子というものについて、電気の専門でない学生に、これはこういう仕掛けで見かけは簡単なようでも中はこうなっている、そしてこれは電源切ると記憶がなくなってしまうもので、別のこれは電源切ると記憶は残ったままとか、教えたものです。当時はそういうことを知らないといけなかったんですが、今は必要ないですね。コンピューターは時代とともに変わるので10年間にはだいぶ勉強しました。時代の進化の一番簡単な例はコンピューターの大きさに、最初のコンピューターは1945年頃、弾道の計算に使ったENIACというのがあって、ざっと高さ3m、幅30m、重さ30tという真空管式でした。当時の機能はみなさんの持っている携帯の電卓機能レベルでした。さらにコンピューターの進歩の度合いも掴んでいってもらわないと、ということで、学生には「これから学校卒業して後40年位仕事すると考えると、今習ったのはほんの序ノ口です。40年の間にはさらにこの後たくさん勉強しなくてはダメです」、と言いました。だいぶ精神訓話みたいなこともやりました。私は一昨年新制中学70周年記念で招かれていきましてつくづく感じましたね。今やっていることだけを頭に入れておくだけではダメで、これからのことが理解できるようにしなくては。これは誰でも同じようなことを言っていると思います。10年勤める間に世の中ずいぶん変わりました。一応70まで仕事しました。

——自衛隊で担当した研究職での研究テーマとか内容はどんな分野でしたか？

福田：主に通信電子の分野です。各大学でも昔は電気工学しかなかったものが、通信工学・電子工学、後に情報工学と、私が修士の勉強をした東北大学では3科ありました（注：大学院は当時『電気及通信工学専攻』となっていました）。計算機の関係の人は初めはどこでも電気や数学の専攻者が多かったようです。電気から電子、通信など新たな分野が分かれてき

ました。特に通信は電話としてみなさんよく知ってらっしゃるようですが、お話ししたいのはレーダーです。このレーダーを日本でようやくなんとか使えたのは終戦の頃の話です。このレーダーは自衛隊では今急速に進歩しました。今となってはレーダーがないと情報が取れないですね。逆にこっちから送る電波で誘導するという精密誘導を利用した兵器も出て来ました。ベトナム戦争の時に飛行機から橋を爆撃する際、弾の先頭に付けたカメラで映しながらその橋と弾が飛んで行く方向とが合うように精密誘導するという兵器（スマート爆弾）でした。その頃はそういうのが画期的な技術だったのです。ですから、私もその渦中であって幸いレーダーについては色々勉強しました。今は静止衛星のような3万何千キロのところから（残念ながら今の日本の防空システムではそこまでの高空のものはまだありませんが）、あらかじめ対象国の誘導弾の発射場所（だいたいわかっているんです、ただし全部とまでは言えません）を見て、そこで発射があると光と熱が出ますから、それをつかんですぐさまその方向から飛んでくるのを追っかけるというのが今のイージス艦などの体系です。発射したところは静止衛星でないとわかりません。地球が丸いので、レーダーの電波は地表面に沿う形で遠くまでいきません。レーダーの電波も少しは曲がるんですが、ほとんど直線です。まあ地球の半径の3分の4倍したくらいには若干回って電波は伝わります（上空は空気が希薄になり空気の濃い方に電波は屈折するから）。それ以上低いところは処理できませんからどうしても上空から衛星観測するしかない。そういう体系で電波監視の体系とか能力というのは大変大切でした。日本もそれにだいたい今は追いついてその最先端に行くぐらいの技術はあります。ただ今日本が所有している静止衛星は地球からそんなに高い位置にあるのではないと思います。早期警戒衛星は話題には上っていますが、その辺の情報体系の話は、私がサンケイ出版に頼まれて書いたのが昭和57、58年頃にあります。今日その資料を持ってこようと思って捜したのですがありませんでした。そこでイージス艦についても書いています。今はその当時より体系を精度よく応用する細かい技術は進歩していますが、体系的には当時と同じようです。今日本にはイージス艦は6隻ありますが、さらに陸上にも置かないと北朝鮮の誘導弾に間に合わないということだそうです。通信についても1個の電波で数千回線（回線数は自衛隊でも、だいたい12の倍数というのが普通回線数として多いのですが）、陸上自衛隊で東京から札幌まで各地の山の上に中継車をおいて繋げるだけの能力はあるぐらいの多重通信というのが進歩しました。私が丁度自衛隊を辞めるぐらいの頃、昭和60年頃から今の携帯電話が実用化しました。今ではなんと携帯電話が地下鉄の中でも通じるのにはびっくりします。通じるとはとても思っていませんでした。通信については自衛隊ではどうやっていたかという、主な山の上に中継所を設けて、車に載せた無線通信機からその通信所めがけて電波を出しそこで受けたのを違うところへ送るという要地通信というものでしたが、いまはそんな時代じゃないですね。どんな人でも地下にいても誰でも通信できる。そのためには今は東京中の屋上にアンテナがあるじゃないですか。それを使って携帯電話会社が4社から5社経営しています。通信もそうやって今は私自身どうなっているのかわからない位発達しました。それからインターネットですね。こ

これはアメリカ国防省に、国防高等研究計画局（DARPA、Defense Advanced Research Projects Agency ダルパと言います。新聞でもときどき名前が出ます）があって、これが各地に通信拠点を設けて、ベトナム戦争のときに、一か所切られても迂回して必ず繋がるという通信の組織（携帯電話に応用されていますが）を作ったのが今のインターネットです。これもまた悪いことにも使われて困っています。この通信システムはベトナム戦争の時に盛んに研究しました。今はベトナムと日本も仲良くしてますね。この間も誰か偉い人がベトナムに行かれましたが。ところで、インターネットの始まりですが、ベトナム戦争の時、カリントウを長くしたようなものに無線機を仕込んで密林に撒いておきます。そうすると、ベトコンは密林の中を隠密行動で壕掘ったり、移動したりして音や振動を出します。その音や振動を撒かれた無線機が蒐集して発信します。それを空中のヘリコプターや飛行機の受信機で受けてどこにベトコンがいるかと特定できるシステムでした。そのくらいあの頃は電波が発達していました。その最中だったので進歩していく技術を追っかけるのにずいぶん勉強しました。

ところで、無人機というものが今ありますね。簡単に個人の方が空中写真を撮れたりしています。ああいう発想に近いものが当時からありました。当時は無人機といってもただ真っすぐに飛ぶというもので、自衛隊にもありました。高射砲の訓練のために、無人機に標的として吹き流しのようなものを引っ張らせて飛ばしました。主に室蘭の沖でやりました。それをめがけて狙う、高射砲の訓練なんかにも使いました。もう一つ別なので、私がやったのは、無人機にカメラを積ませて、下の状況を撮って、ある特定の場所で回収して写真を現像しました（現像なんて今では不要になりましたが）。それくらい10年か20年の間には技術は進歩していますね。だからそういう電波利用の実験から新しい機材の開発までさまざまなことを経験しました。

また電波法にも抵触しますが、電波妨害という技術もあります。相手の電波を受信してどういう電波か解析してその通信の中身をぶち壊すような電波を出すという技術です。今はどうなっているか、もう離れてからなにしろ30年位経ちますから、よくわかりませんが。

私は自衛隊で主に電波の関係に従事していました。この分野に入るには四中の先輩の示唆がありました。私は最初高射砲だったのですが、レーダーをやりたい、という志望もありました。ところで、高射砲に行き目を見張ったのはアメリカの色々な計算機化した車載装置です。もっとも使用している計算機はアナログ計算機でした。その程度の計算機なら日本にもあったようです。どういった高射砲装置かというたとえ、飛行機が飛んでくるのをつかまえて、どれくらいのスピードで真っすぐ飛んでいるか、カーブしているかとかある程度計算でつかんで、その前方へ弾を撃ってその高さで高射砲の弾を破裂（時計信管）させて破片で飛行機を傷めるといったものでした。通常狙撃したってめったに当たりません。これは考え方もすぐれものでした。昭和40年頃の話ですね。日本にあった高射砲は一番太いので90ミリです（注：アメリカには120ミリがありました）。それから75ミリというものもありました。40ミリというのもありました。戦車の主砲は高射砲から換装するのが多いので7

5ミリか80ミリですね。その高射砲の射撃指揮装置の教官が四中昭和16年卒の、佐合邦彦さんという方だったのです。この方は辞められてから特許庁で仕事をされていました。佐合さんが、「君、高射砲担当ならば、まだこれからうんと勉強しないと間に合わないから勉強しろ、そのためには立派な先輩を紹介する」と言われて、四中昭和6年卒の岡本正彦さんを紹介してもらいました。この方は終戦のとき少佐でした。陸軍砲工学校という学校を優秀な成績で出られて、京都大学で勉強（員外という制度）されて、その頃まだ博士ではありませんでした。終戦の時少佐として「高射砲誘導装置の研究」とかいう題で陸軍有光功賞という賞を受けられました。その後、終戦後医師になられました。当時三菱電機におられて、横浜市大医学部を出られて医師になって、横浜で開業されて、午前中は自宅で診療、午後は三菱電機の誘導飛翔体で誘導弾の研究をしていたという方でした。その方から色んなご指導いただきました。その方も陸軍から京都大学へ行ったのです。その方が「自衛隊でも勉強させてくれるのだから、君も、もしできたらそういうことをやったらいいよ」と言われて、当時東北大学の大学院に行って部外研修というのをやりました。その頃私の他にも同期で20数名そういう道を歩んでいます。後に岡本さんに恩返しをしました。私はロシア語を多少大学で勉強していたものですから、ロシアの「機械式高射砲誘導装置」という青焼き複製の分厚い文献を、技術文献なので文体や表現が比較的翻訳しやすかったので、翻訳してお手伝いしたことがあります。その頃から自衛隊の高射砲関係がホークという誘導弾に替わる時期でした。アメリカの教育体系をそっくり日本に持ってきて、若い人から大隊長になるくらいまでの人（私の元違う分野の教官だった人まで）を対象に、だいたい11週～13週（13週というのは修理の課程に行く人は2週長い。普通は11週。）位の期間、講義・実験をするという基礎電子課程というのがありました。それを終わると、皆さんホークの勉強にアメリカに行くのです。そういうところの教官をずいぶん長くやって、大学の勉強では教えられないような、電子回路の具体的な回路について丁度勉強しながら教えていくということをしました。普通ほかの方はその課程を終わって、できた方が教官になるんですが、私なんかよそで勉強したからといっていきなり先生をやらされました。教育内容は、レーダーに使われている回路のポイントになる電子回路を11週で典型的にことこまかく分けて（まだ真空管でした）、真空管の回路から発電機まで一通り（アメリカは基礎教養を漏れなく全員に教育するのです）習って、それを受けた方がアメリカに行ってホークの実際の装備で勉強をするという具合です。日本にはまだホークの実物がありませんでした。それでも日本は優秀ですね。アメリカでホークを受け取って使っている各国が実射訓練やるわけですが、その中で優秀だったそうです。私は話を聞いているだけで自分で見たわけではありませんが。そういうふうに、電気・電子・通信の教育と研究開発とに人生の大半は携わってきました。

——今の兵器体系で一番ベースのところですね。

福田：大抵は変わっていませんね。ただし真空管はトランジスタに替わり、トランジスタはICに替わり、さらにはLSIに替わりというふうに変わってきましたけどね。

【自衛隊における四中・戸山の人脈】

そういうことで、佐合さんに特に指示されたり、岡本先輩に親身に教えていただいたり、逆にお手伝いもしましたが。そういった関係の方にお世話になりました。戸山高校の縁でもずいぶん引っ張っていただいたな、って感じはしています。その外いろんなところで、私が学生や任官した頃には知らなかったけれども、だいたいどこへ行っても四中の先輩がおられましたね。まず防衛大学に入ったら中隊指導官というのが楠(S14)さん。弟さんは同期生ですが。その人が先輩だってことはその頃は知りませんでした。後でわかりました。幹部候補生の時、学生隊長というのがありました。それが森川竹雄(S9)さんという人で、城北会の事務局長をやられましたが、その時まで同窓とは知りませんでした。さらに、その時の陸上自衛隊幹部候補生学校の校長が平井さんという人で、林敬三さんと同期の方ですけど、その人がどういうわけか私のことを調べていて、校長室へ来いっていわれました。校長室へ呼ばれるのは大抵悪いことをしてる人が多いので、皆が心配してくれました。「お前なにやったんだ？」って。「いや個人的なことです。」って言ってあまりくわしい話はしませんでした。校長室で校長に「君はどこに行くことになったのだ？」って聞かれ、「実は高射砲に行きます」と答えました。「普通科行かないのか？」とは言われました。それでその頃、自衛隊には結構先輩がたくさんおられるんだな、ってわかりましたね。

—— 一中より四中の先輩が多かったようですね。

大東：一中と四中を比べると。一中は一高・東大をめざすということで、軍の方にはそんなに皆がこぞってというふうではないのですが、四中の方は陸士・海兵そして一高と、陸士・海兵にかなり力を入れていました。だから終戦の年、その前の年あたりには、幼年学校にはだいたい20人位入っています。ですから軍学校に進んだ先輩としては一中より四中の方が多という関係にあったと思います。それで、某先輩に言われてリストを私作ったことがあるのですが、残念ながら昭和に入る前の名簿ができないのです。というのは、大正9年に文部省の制度改革がありまして、いわゆる高等学校に中学四年から受験できるようになったのが大正9年なのです。それまでは幼年学校に進んだ人は当時の府立四中としては中途退学としました。進学ではないとして城北会に入れてないのです。で昭和16年の名簿を私手に入れて調整したのですが、その中で明治時代の卒業生で幼年学校に行った人で唯一名簿に出ていた人のお名前は誰か見当つきますか？東條英機です。その当時の首相ですよ。ですから、あれは四中出身だ、ということで名前が載ったのですが、後は幼年学校から士官学校へ行った人たちはみんな四中中途退学で城北会から排除されていました。ですが、大正9年以降は幼年学校から士官学校へ行った人についても、他方で四修で高等学校行った人も同窓生ならこの幼年学校に途中退学で行った人も同じだ、ということになって同窓会に入れました。そういうわけで、昭和16年の同窓会名簿で調べがつかうのですが、それから前は残念ながら調べるデータが出なかったのです。

福田：平井さんという人は幼年学校だから名簿にはありません。昭和14年の田野垣さんもやはりないのだけれども、「福田君、俺も戸山の名簿に入れるように頼んでおいてくれ。」っ

ていうので入っています。もう亡くなりましたけどね。

【自衛隊での戸山OB会、靖国偕行文庫】

——自衛隊では四中・戸山の卒業生が陸と海に分かれて同窓会を開いていると聞いています。なんで一本にならないのですか？陸の方はもうその同窓会をやめたとか。なんで一本にならなかったのだろう、という疑問があります。やめるまでずっと集まっていたそうなので、その記録をお願いしたいと思います。もう一つ、今日はとてもいいお話だったので、我々だけで伺うのはもったいないと思っています。もう一度靖国神社の会議室などでお話を伺うことはできませんでしょうか？

大東：私らの城北偕行会というのは陸士61期、最後の昭和20年に陸士に入った方が一番若いからというので幹事を押し付けられて続いてきました。先輩がなにかの拍子に「後のことが心配なんだよな」と言ったとき、たまたま私がその場所にいたわけですよ。「なんのお話ですか？戸山のお話ですか？」って聞いたら、その先輩が「お前戸山か。ならば今度はお前だ！」と決まってしまうました。そんなわけで10年間もお世話をする破目になりました。ただ、記録を細部まで残しておくようになってなかったのが、コンピューター上痕跡は残っていますが記録を再現することは難しいのが現状です。今日は千葉の城北会からのお話ということで「千葉に行くのだったら行くよ」、というつもりで来ました。防大卒業何周年かのときに全員が所感を書いて出せ、というのがあってやりましたが、出してみると、私の経歴はうちのクラスの中では確かに例外なのです。私ははっきり言ってそういう点では、娑婆の飯を一回も食ったことがないのです。制服を脱ぎましてからも、防衛省防衛研究所の戦史部長ということで5年間、戦史研究のマネジメントをしました。私は防衛研究所はリサーチを仕事にしているのではではないと言っているのですが、陸海空研究員30人程いまして、それが研究テーマを持って、逐次論文を作成していっていました。その論文の方向付け、まとめの総括、そういった仕事をやらせていただいて、防衛庁の戦史部の資料庫というものの実態を全部掴ませてもらいました。その掴む機会で何があったかといいますと、「従軍慰安婦」とう問題が出てきまして、軍関係の慰安婦に関する文書がどこにあるのか、ないのか、どれだけあるのかということをお願いされました。つまり軍の関与する記録があるのかないのかということです。そもそも「軍の関与」の定義は？と聞いても、結局、河野洋平、当時の官房長ですね、彼からは何にも出てこないわけです。それでは責任は負えませんとお答えせざるを得ませんが、それでは事態は収まりません。だから、「慰安婦」「慰安所」「性病」こういった関係の言葉が出てきたものは拾いますとしました。拾う対象は公文書、ということであそこに30人ほど研究員がいるわけですけど、丁度1月頃にその話が出て、2月位に具体的に調査やれということで、年度末にレポートを提出しなければいけない状況でした。ただしそれからややトーンダウンしてレポートの提出については別に指示するので延期するということになりました。それで、書庫には公称20万冊位あるんですが、目次が全部整備されているわけじゃないものを、昭和12年以降の文書で「慰安所」「慰安

婦」というような関連の言葉が記載されていることがあったら全部拾い出せ、と言って1ヶ月間書庫の中へ研究員を30人ほどほうりこんで、全ページを繰らしたんです。ただ作戦文書の方はあまり見ませんでした。陸軍省・海軍省所轄文書の範囲にしました。全部ページを繰らしまして、当時100件くらいですかね、文書が出ました。そこで新聞社から色んな話が出まして、例の中央大学の吉見教授という方が「慰安所について」という文書があると言って新聞に出したりしました。あの文書だって、軍が関与したことには違いないでしょう。しかし文書そのものは「悪い業者がいて拐帯まがいのことをやっている悪質な者もいるからよく業者の選定に注意をして十分取り締まりをやれ」、という文書なのです。それを軍が従軍慰安婦に関与した証拠であるとするのはどうでしょうかね。確かに関与は関与ですが。「取り締まり」も関与のうちと言えなくもありませんが。これを「軍が従軍慰安婦に関与した証拠である」、と朝日が言って大々的に取り上げました。私が「この『関与』って何でしょう？『取り締まった』ことが『関与』なんですか？」と言ったら、他の新聞社は、「そりゃそうですけど、朝日があそこまで言ったらもう誰も言いませんよ」というような話で終わってしまいました。

戦史部長をやりまして、それを降りたときに、靖国神社で戦友会あたりからずっと戦友の事績であるとか部隊史であるとか記録をご奉納いただいたものがかなりある、それから陸軍の将校の集まりだった偕行社で「俺の部隊の記録はどっかに残しておきたい」ということで偕行社に持って来られたものもかなりある。しかしこれを二つに分けて倉庫の中に置いとくままでもしょうがないだろう。むしろこれは関連図書館を開いて皆さんにご利用いただくようにしたらいいんじゃないかという話が出ました。丁度私が戦史部長を退任したものですから、靖国神社から図書館開設を手伝わないか、と言われて、こちら靖国神社なら、といった気持ちがありまして、それで靖国神社へお手伝いすることにしました。現在、靖国偕行文庫という図書室がありまして、おそらく軍事関係では日本の図書館の中では有数のものを持っていると思います。蔵書は私が行って当初立ち上げたときは8万冊位です。その後、図書の寄贈を受けたりなんかして現在15万冊を超えているはずです。その図書の主力は軍事関係・宗教関係・歴史関係です。神社ですから宗教関係もあります。そういうことで戦史資料図書館は、防衛研究所の戦史部（あそこは記録を保管するところでその参考資料として公刊図書が多少ありました）、靖国神社の文庫室、国会図書館（これは基本的に納本原則になっていますから、かなりのものがあります）、それからもう一つだけ特異なものとして奈良県の県立図書館というのがあります。そこが戦争体験文庫というものを作りたいということで、私は文庫室でやっているときに行って、靖国偕行文庫で持っております図書の中で従軍記あたりを向こうにかなり分けてあげたことがあります。ここあたりが戦争関係の公刊図書をもっているところです。公文書はございません。公文書は全部防衛研究所しか置いてないのです。そういうことをやりましてそれが一段落して、ゆっくりしようと思ったら、偕行社という旧軍将校倶楽部ですね、その最後に残った団体の方から歴史関係の調査事項なんか依頼がくることがあるから手伝えと、ということで現在もまだ戦史の仕事を

引っ張っています。借行社では主な調査部関係の業務を受けていますが、その外に毎月1回の「借行」という雑誌（60ページ70ページ位の雑誌で毎月刊行します）の編集委員ということもやっています。そんなことで大学入ったときから現在に至るまで一回も娑婆の飯を食ってないわけです。だから「お前は特異人種だ」と言われますけど。

もしお身内の方その他でなにか調べてほしいということがあれば、私自身は資料は持っていませんけれど、どこでどういうところに聞けばどこには何があってどういうぐらいのことがわかるということなど調べる方法のことならある程度頭の中に入っていますのでご利用いただければと思います。私の場合、完全な軍人たらんとしてついに軍人になれなかったおたまじゃくしのなりそこないの65年でした。

——大変難しい状況の中でしたけど、戦闘がなかった、というのはそれなりにはよかったのじゃないでしょうか？

大東：そうですね。我らここにありて国安らかなりというところでしょうかね。この平和を維持できる基礎にはなったろうと思います。



当日の参加者（敬称略、写真の向かって左から順に）

福田（S28）、大東（S28）、於保（S35）、兵頭（S50）、白石（S41）、尾崎（S31）、岡田（S35）